



建学の精神

「願わくは、このキリストの泉から若者たちの清らかさと愛とが湧き出でんことを」

というラテン語の言葉には、広く豊かな教養と専門的な知識・技術を身につけ、健やかな子供の成長を支える人材に育てほしいとの切なる願いが込められています。

福祉を必要とする子供たちの保育・養護に献身しようとする者、幼児教育に従事しようとする者に、キリスト教精神に基づいて、広く豊かな教養と専門的社会福祉理論と技術を身につけさせ、各種の児童・社会福祉施設及び幼稚園で指導にあたる専門職員を育成しようとしています。



クラーク学園 校章・マーク
父、子（キリスト）、聖霊の三位一体及び、信仰、希望、愛の教えを示す逆三角形の中に、I.J.C. (Izumi Junior College) と小さな十字架が描かれています。

学校法人 クラーク学園

〒252-5222 神奈川県相模原市中央区青葉2-2-1

TEL : 042-754-1133 FAX : 042-753-2087



創立

クラーク学園は、1956年(昭和31)に設立された〈バット博士記念ホーム〉を前身としています。

カナダ人宣教師 G・E・バット博士は、1921年(大正10)カナダ合同教会宣教師として来日し、江東区の社会事業に従事。日本における CCF (Christian Children's Fund, Inc.: 社会福祉法人基督教児童福祉会) の働き手となるカナダ人宣教師 ヴァレント・ジョン・ラッセル・ミルの力強い先輩で、戦後はアジア救済委員会 (Licensed Agencies for Relief in Asia: 通称ララ) による戦災孤児の救済活動に邁進しました。ちなみに、日本向けの援助物資(主に脱脂粉乳と衣類)はララ物資と呼ばれました。バットは、ララ運動の激務から心臓病で急逝してしまいます。

CCF はバットの死を悼み、世田谷区玉川中町に小舎制で家族のように生活する児童養護施設〈バット博士記念ホーム〉を開設したのです。

CCF はカルビット・クラーク博士が創設した団体で、全米で募金活動を展開し、第二次世界大戦の戦禍で疲弊した世界の子供たちに援助の手を差し伸べました。アジアでは、中国の孤児院に支援金を届けたのを皮切りに、1947年(昭和22)ごろから日本への援助が始まり、1952年(昭和27)にバットや V・J・スミスとともに全国の養護施設の助成を開始しました。

当時、日本では、福祉施設職員の資質向上が福祉界での重要課題であったため、福祉従事者の現任訓練機関としてホームの敷地内に別法人として〈バット博士記念養成学校〉が設立されました。1960年(昭和35)日本初の入所型保育士養成機関〈玉川保母専門学院〉を設置。1965年(昭和40)には CCF の支援を受けて、〈クラーク学園和泉短期大学〉児童福祉科へと生まれ変わりました。のちにホームは町田に、和泉短期大学は相模原に移転しています。別個の法人ではありますが、クラーク学園は〈バット博士記念ホーム〉の土台の上に建ち、同じルーツを持っているのです。

クラーク学園は、全国に先駆けて老人福祉ワーカーの養成に着手。キリスト教による「愛と奉仕」の精神で、幼児教育と老人福祉の両輪で福祉教育を実践し、各分野で活躍する人材を育成しています。

創立の背景と歴史

クラーク学園の生みの親、カルビット・クラークは1887年(明治20)6月30日、アメリカのニューヨーク・ブルックリンに生まれました。クラーク一家はフランス系の名門でしたが、アイルランドの内乱を逃れるため、アメリカに渡り貧しい移民となりました。しかし、信仰の篤い両親のもとで高い教育を受け、ベレヴュー大学より神学博士の学位を与えられ、長老派の牧師になりました。1913年(大正2)に19歳のヘレン・キャロライン・マトソンと結婚。第一次世界大戦で YMCA から派遣されて従軍したときに、フランス・マルセイユで悲惨な子供たちを見たことから「戦災の犠牲になった子供たちのために献身しよう」と決心しました。

クラークの活動母体である CCF は、彼が児童福祉に携わって35年が経とうとした1938年(昭和13)、ペンシルベニアのチェンバースバーグで生まれました。

クラークは、シンガポールで子供たちの支援活動をしていたメソジスト派の宣教師と、理髪店の店先で偶然出会って「幼い子供が飢えのために死んでいくのは本当にかわいそうです」と話しかけました。その宣教師が「そう言うなら、なぜ、あなたが何かしないのですか?」と言うのを聞き、クラークは自分が行動を起こさなくては、と考えました。これまでかかわりのあった人たちに、子供たちの窮状を訴える手紙を書き、支援の依頼を始めたのです。やがて全米各地から募金が集まり、一カ月後には飢えた避難民の子供たちがいる中国・広東省のホームに最初の700ドルの小切手を送ることができました。

日本への援助は、1947年(昭和22)熊本のルーテル派宣教師 モド・パラウス女史からの働きかけ、GHQ 福祉部から東京育成園への打診、ついでバットや普連士学園園長 E・B・ローズ女史からの要請から始まりました。また、日暮里の愛隣団やキョククリヒ女史の愛泉寮が翌年から援助を受けています。

こうした直接的な接触を通じて、CCF 本部は日本の窮状を知り、中国で共に活動したミルスを日本に派遣。受け入れ側の日本では、日本基督教協議会(NCC)社会部会が、CCF の活動に協力しました。ミルスはその優れた組織力と行動力で、ブルドーザー・ミルスとあだ名されました。

クラークはヘレン夫人とともに1952年(昭和27)以来、3回来日しています。それは見たこともない、かつての敵国の孤児のために捧げられた援助金が、正しく有効に使われているか、それによって子供たちが幸福になっているかを確かめるためでもあったと思われます。これらの善意の浄財は、一般の市民のわずかな収入から捧げられたものだからです。

また、単にお金をあげるだけではなく、精神的な里親になることを奨励しました。スポンサーたちは「心の我が子」に手紙を書き、贈りものをし、写真を交換しました。旅行で日本に立ち寄ったときには、子供たちに会うことさえもしたのです。対象となった児童は、宗教、人種を問わず、もっとも助けを必要とするところに与えられ、子供たちは里親に尊敬と愛情を抱きました。1964年(昭和39)クラークが CCF の国際総主事を引退するまでに救済した児童は、4万4000人、56カ国に及びました。



創立者 J. Calvitt Clarke (1887~1970年)
世界の子供が神の一家の子供であることを願い、戦争や憎しみ合いをなくすことを祈りました。

